世界短編名作選
ロシア編

監修　蔵原惟人

新日本出版社

世界短編名作選
ロシア編

監修　蔵原惟人
編集　草鹿外吉
　　高橋勝之

新日本出版社

世界短編名作選　ロシア編

1976年12月20日　初　版
1978年6月10日　第4刷

監　修　蔵原惟人
編　集　草鹿外吉
　　高橋勝之
　　山村房次
発行者　松宮龍起

郵便番号112　東京都文京区大塚3の3の1
発行所　株式会社　新日本出版社
電話 東京（945）8511（代表）
振替番号　東京 3-13681
印刷　亨有堂印刷　製本　小泉製本

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

世界短編名作選　ロシア編

目　次

駅　長……プーシキン／丸山政男訳　5
外　套……ゴーゴリ／横田瑞穂訳　21
エルモライと粉屋の女房……ツルゲーネフ／斎藤　勉訳　61
舞踏会のあと……トルストイ／法橋和彦訳　77
百姓マレイ……ドストエフスキー／岡林茱萸訳　93
一人の百姓が二人の高官をやしなった話……サルトゥイコフ＝シチェドリン／西尾章二訳　101
駐在所……ウスペンスキー／高橋勝之訳　111
赤い花……ガルシン／小野理子訳　145

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c

下士官プリシベーエフ……チェーホフ／和久利誓一訳 163
いいなずけ……チェーホフ／角　圭子訳 171
老いたる鐘つき……コロレンコ／宮原克己訳 195
転　轍　手……セラフィモーヴィチ／蔵原惟人訳 203
サンフランシスコの紳士……ブーニン／草鹿外吉訳 221
ある秋のこと……ゴーリキー／松本忠司訳 245
人間誕生……ゴーリキー／山村房次訳 257
解　説……草鹿外吉 273

駅長

プーシキン
丸山政男訳

アレクサンドル・セルゲーヴィチ・プーシキン

（一七九九～一八三七）

代表的作品は詩型小説『エヴゲーニイ・オネーギン』（一八三〇）、小説『スペードの女王』（三四）、『大尉の娘』（三六）など。ほかに、多くの抒情詩、叙事詩、散文、戯曲などがある。

位は十四等官〔帝政ロシア時代の最下級官吏〕ながら
駅逓馬車駅の独裁者
ヴァーゼムスキー公爵〔プーシキンと同時代の詩人〕

誰か、この駅長〔帝政時代の駅逓馬車道にある駅舎管理人〕どもを呪咀しなかった者があろうか。誰か、この駅長たちと罵り合わなかった者があるだろうか。誰か、腹立ちまぎれに、彼らの迫害、粗暴さ、だらしなさに対する、自分のむだな不平、憤まんを書きこむために、宿命的な「苦情書込帳」を出せと、駅長たちに迫らなかった者があるだろうか。誰か、彼らを、昔の、げすな下っぱ役人か、すくなくともムーロム森に巣くう盗賊どもと同じような、人でなし、悪党と思わない者があるだろうか。だが、ここで、公平に正しく考えてみたら、どうだろう。彼らの立場に立って、考え直してみたらどうだろう。そうすれば、おそらくずっと寛大な気持ちになって、彼らのことを判断することができるのではなかろうか。

そもそも、この駅長とは何者なのだろうか。実は、十四等官という官等の故に、からくも、他の殴打を免かれている、――それとていつも免れているとは限らない――十四等官という官等をもつ、みじめな受難者なのである（私は読者の良心に訴えて、こういっているのだ）。ヴァーゼムスキー公が、冗談に独裁者とよんでいる、駅長の役目と仕事は、いったい、どんなものなのだろう？　それは、ほんとうの苦役というものではなかろうか。昼も夜も、休むときとてないのだ。退屈な旅の間に、積もり積もった、うっ憤を旅行者は、みんなこの駅長にぶちまけ、あたりちらすのだ。天気がわるいの、道がひどいの、御者が強情なやつだ、馬がよく走らない、――なんでもみんな駅長のせいだ、責任だといわんばかりなのだ。旅行者は駅長の貧しい駅舎に入ってくるなり、まるで、自分のかたきでも見るような目付きで駅長をにらみつける、この招かれざる客が、早々に用がすんで立ち去ってくれれば幸いだが、もし替馬が間に合わなかったりしたら、どうなることか！　さあ、大変だ、なんという、ばり雑言、なんという、おどし文句が、彼の頭上にふりかかってくるだろう！　雨の中を、ぬかるみの道を、彼は百姓家を一軒一軒、馬をさがして走りまわらねばならない。嵐の日でも、ひどい厳寒の日でも、いきり立つ宿泊人のどなり声や、押されたり、突かれたりする

のを、のがれて、せめて一分でもいい一息つくためにうすら寒い入口の間に出てゆくのだ。将軍閣下がお着きになる。恐れおののいて駅長は取っておきの最後の二台分のトロイカを将軍に差しだす、実はその一台分は、急使用の分なのだ。将軍は彼に、有難うの言葉ひとつかけずに行ってしまう。五分もすると、鈴の音がまたきこえてくる！　やがて、文書急使（フェルドイェーガル）が、彼の机の上に、官用の駅逓馬車券をぽいとほうりだす！

こうしたすべての事情をよくつきとめてみれば、彼らに対して憤慨の代りに、私たちの心は、心からなる同情の念に満たされることであろう。ついでにもう少し語らせてもらえば、私は二十年もの間、ずっと、ロシアの東西南北、各地にわたって走りまわり旅をしてきている。だから、駅逓馬車道という馬車道は、ほとんど、みんな知っているし、御者も何代かにわたって知ってるし、顔なじみのない駅長はほとんどいないし、なにかのかかわりを持たなかった駅長もごく稀だ。というわけで、私は面白い旅行見聞談を数多く持っている。そのうち、それを発表したいと思っている。ここでは、駅長の身分に対する、一般の人の考え方が、ひどく間違っていることだけは指摘しておきたいと思う。あれほど悪口をたたかれている駅長たちは、実は、概して、おとなしい、生来の、世話ずきな人間で、そんなに思いあがったところもなく、そんなに強欲な人間でもないのだ。彼らのする話の中から（そういう話を旅の旦那方は、ばかにしたり、軽視しがちだがそれは穏当でない）、興味深い、教訓的なものを汲みとることもできるのだ。私に関する限りでは、公用で旅行をしている、そこらの六等官どのの話をきくより、駅長たちと話し合う方が、よほど、ましだと思っている。

ところで私が、この駅長という、尊敬すべき身分の友人たちを持っているということは、容易にお察しのつくことかと思う。実際、そうした駅長の一人についての思い出は、私にとってこよなく大切で貴いものである。もう大分、前の話だが、ある事情から、私が親しくなった、その駅長のことを、今、親愛なる読者に語りたいと思う。

一八一六年の五月に、今はなくなってしまった駅逓馬車道に沿って、ある県を通ってゆくことになった。私は当時、まだ小役人だったので、駅馬乗りつぎの郵便馬車に乗りついで、馬車代も馬二頭分だけ払っていた。したがって駅長たちは、私に対して一向遠慮だてをしないし、私の方もまた自分の考えで、当然権利があり正しいと思ったことがらは、それこそ力ずくでも、かち取ったりもした。当時私

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c

は若くもあり、熱っぽい人間だったので、駅長が私のために、用意されていたトロイカ（三頭の馬）を、高官どのの半幌馬車用に、用立てたりしようものなら、駅長の卑屈さと意気地なさに対し、激怒したものだ。同様に、県知事の午餐会で、詮議立てする召使いが、私をとばして皿をくばったりすることにも、長い間、我慢できなかったものである。今になってみれば、それもこれもみな、ひとつのものの秩序であり、至極、あたり前のことと思うようになっている。実際に、「万事位順に」とか、「位の上のものは尊べ」とかいう一般に通用しているあの規則の代りに、たとえば「万事智能順に」とか「智能の高いものは尊べ」といった規則を取り入れたならば、われわれは一体、どんなことになったろうか？　とんだ論議が起こることだろう。召使いどもは、誰からさきに食事を出したらいいだろうと、困ることだろう。それはともかくとして、私の物語りに入ることにしよう。

それは暑い日であった。X駅舎から三露里（一露里は一・〇六七キロメートル）のところで、ぽつぽつ降りだした雨が、一分後にはひどい土砂ぶりとなり、私は下着までずぶ濡れになってしまった。駅舎にたどり着いた直後、私の第一の仕事は、一刻も早く着替えをすること、第二には、お茶を頼むことだった。……「おい、ドウニャ！」と駅長はどなった。「サモワールを立てて、クリームを取りにいっておいで」

この言葉につれて、十四、五歳ぐらいな少女が、間仕切りのかげから出てきて、入口の間にかけていった。その少女の美しさに、私は強くうたれた。「あれは君の娘さんかね」と私は駅長にきいた。「娘ですとも」と彼はいかにも自尊心のあふれた様子で得意げに答えた――「とても利口もので、とてもすばしこい子で、なくなった母親にそっくりなんですよ」。そこで駅長は、私の駅逓馬車券を書き写しにかかった。私の方は、粗末ながら、小ざっぱりとした住居を飾っている何枚かの彩色絵を観察していた。放蕩息子が、悔い改めて帰ってくる物語りを描いたものだ。一枚目の絵は、円い部屋帽をかぶり、寛衣をまとった立派な老人が、老人から祝福と財布をあわてて受け取っている、心おちつかない、若者を、旅に出そうとしているところだ。二枚目の絵は、鮮やかな線で、この若者の、ふしだらな行状が描き出されている、若者は、偽りの友達や恥知らずの女どもに取り巻かれて、食卓に着いている。そのさきの絵は、おちぶれた若者がぼろをまとい三角帽をかぶって、豚の番をしながら、豚とたべものを分け合っている、若者の顔には深い悲哀と悔恨の情がきざまれている。最後の絵

は、若者が父親のもとに帰ってくる図である。同じ円帽と寛衣を着た、善良な老人が息子を出迎えに走り出てくる、放蕩息子は膝まずいている。遠景には料理番が肥えた小牛を屠っており、若者の兄が、なぜこんなお祭り料理を作るのかと、召使いたちに、たずねている。それぞれの絵の下に、書かれた気の利いたドイツ語の詩句を私は読みとった。こうしたいっさいのもの、鳳仙花の鉢植えや、色模様のカーテンをかけた寝台や、その他、当時私を取りまいていたすべての物象が、今もなお、はっきりと私の記憶に残っている。五十がらみの、いきいきとした、元気のいい当のあるじも、その色のあせた綬に三つのメダルをつけた、裾の長い、青色のフロックも、今も、ありありと眼の前に見る思いがする。

私が年寄りの御者にまだ支払いをすまし終らないうちに、ドウニャはサモワールを持って戻ってきた。このなまめかしい、媚をふくんだ美少女は、自分がどんな印象を私に与えたかを二目で、みてとってしまったらしい。彼女はその大きな空色の眼を伏せたのだ。私はいろいろと彼女に話しかけてみたが、彼女は、世なれた娘のように、なんの臆するところもなく、はきはきと受け答えをした。私は彼女の父親には、ポンス酒をすすめ、ドウニャには紅茶を与え、こうして私たち三人は、百年の知己のように、いろいろと話し合った。

馬の用意は、もうとっくにできていたけれど、私はどうにも駅長とその娘とに、別れたくなかった。ようやくの思いで、私はこの二人と別れのあいさつをかわした。父親は道中の無事を祈ってくれたが、娘の方は私を馬車のところまで見送ってくれた。私は入口の間で、立ちどまって、接吻の許しを乞うてみた。ドウニャはすぐ承知してくれた……

くちづけというものを知ってこの方

思えば、私はずいぶん、たくさんのくちづけを知ってきたが、この時のくちづけほどかくも甘美で、かくも長く忘れえない思い出となったものは他には一つもなかった……。

それから、数年経って、その同じ駅逓馬車道を通り、ちょうど、その同じ場所、同じ駅舎に行くことになった。私は老駅長の娘のことを想いだし、再びあの娘に会えると思うと、心たのしくなった。でも、ふと、不安な予感が私の心を横切った……ひょっとすると、あの老駅長は、交替していなくなっていやしないか、あの娘はもう嫁にいってし

まったのではないか。それどころか、あの二人のうちの誰かは死んでしまったのではないかと。そして、私は、この悲しい予感さえもって、あの駅舎へと近づいていった。

馬車は、駅舎のそばでとまった。駅舎に入ると、私はすぐに、あの放蕩息子の物語りを描いた絵に気がついた。卓も寝台も、そのまま、もとの場所にあったが、窓べには、もう花はおいてなかったし、あたりは、なにか、みんな古くさく、なげやりになっているようだった。駅長は毛皮外套をひっかぶって眠っていた。私の到着で彼は眼をさまし、立ち上がった……。それは、まさしく、あのシメオン・ヴィリンだった。だが、なんと老けこんだことだろう！彼が、私の駅逓馬車券を書きうつしている間に、彼の白髪と、もう大分前から剃っていないひげぼうぼうの顔にきざまれた深い皺や、曲がった背中を、私はじっと見ていた。

――私は、わずか三、四年の歳月が、あの元気のよかった男を、こんなにも貧相な、弱々しい老人に変えてしまっているのに、まったく驚き、あきれるばかりだった。

「私が誰だか、わかるかね」と私はきいてみた。「私と君とは、昔からの知合いなんだがなあ」

「そうかも知れませんな」と彼は、陰気に答えた、「なにしろ、ここは大きな馬車道ですからな、旅の人はたくさん、うちへよりますんでね」

「君んとこのドウニャは達者かね」と私は続けた。と老人はふと顔をしかめた。

「あれのことは神さまだけが御存じですわい」と彼は答えた。

「じゃなんだね、お嫁にでもいったんだね？」と私は言った。老人は私の言ったことが、きこえなかったふりをして、私の駅逓馬車券を小声で読みつづけていた。私は自分の質問をやめて、お茶の用意を命じた。好奇心が、私をかき立て、不安な気持ちになった、そしてポンス酒なら、この旧い知己のかたくなな口を解きほぐすことだろうと思った。

私のねらいは狂わなかった、老人は私のすすめた酒を断わらなかった。私は、ラム酒が、彼の不きげんを、吹き晴らしていくのを見てとった。二杯目になると、彼は、大分、おしゃべりになってきた。ほんとうに、私のことを思い出したのか、思いだしたようなふりをしたのかよく分らないが、とにかく、その時、ひどく私に興味を起こさせ、感動さえさせた物語りを私はききだしたのである。

「では、あんたは、うちのドウニャを御存じでしたか」と彼は話をはじめた。「あの子を知らなかった人なぞありゃ

しませんよ、ああ、ドウニャ、ドウニャよ！　なんといういい娘でしたろう。どんな人が来られても、みんなあの娘を賞めてくれて、あの娘を悪くいうようなひとは、誰一人ありませんでしたからな。貴夫人がたは、あの娘に、スカーフや耳輪をくださるし、旦那がたは、昼食や夕食をたべるような顔をして、わざわざここにお立ち寄りになりましたが、実のところは、少しでも長く、あの娘を見ていたかったというのが本音なんでさあ。どんなに怒りっぽい旦那だって、あの娘のいる前では、静かになり、わしとも、おだやかに話をしてくれるというわけです。旦那も、信じられないでしょうが、急使や文書急使の人たちでさえ、半時間も、あの娘と話しこんでゆくんですからな。この家は、あの娘のおかげで、もっていたんですよ、家の片付けから、料理のことまで、なんでもいっさい、うまくやってくれたんです。この老いぼれの、わしときたら、あの娘をいくら見ても、見あきることがなく、うれしくて、うれしくてたまらんのでした。わしとしたって、どんなにドウニャをかわいがり、あの娘を大事にしたことでしょう。あの娘にとっても、ここの暮らしは、決してわるい暮らしではなかったんです。ところが、災難というものは、どうにも避けられないんですな、さだめというもんは、どうにもならんもんですな」

ここで、彼は、詳しく自分にふりかかった災難と不幸について語りはじめた。

三年前のある冬の晩方、駅長は、新しい帳簿に線をひいていて、娘は間仕切りの向う側で自分の着物を縫っていた。と、そこへ一台のトロイカがやってきた。この旅の人はチェルケス風の毛皮帽をかぶり、軍人用外套を着て、襟巻きにすっぽりくるまっていたが、部屋に入ってくるなり、すぐ馬を出してくれと言った。あいにく、馬はみんな、出はらっていた。この知らせをきくと、旅の者は急に声をあららげ、革鞭をふりあげんばかりだった。こんな場面にはもう慣れっこになっていたドウニャは、仕切りのかげから、すばやく出てきて、やさしく、何か召しあがりませんでしょうか」と彼に向って言った。ドウニャの出現は、いつもの効果を現わすのだった。旅の人の怒りは治まった。彼は、では、馬のくるまで待つことにしようと言い、夜食を注文した。濡れた毛深い帽子をとり、襟巻きをはずし、外套をぬいでみると、この旅の者は、まだ若くて、すらりとした、黒い口髭をはやした軽騎兵の士官だった。彼は駅長のそばに坐りこみ、愉快そうに、駅長や娘と話をはじめた。夜食が出た。そうこうしているうちに、馬たちもつい

たので、駅長は外にとびだし馬に飼料もやらずに、すぐさま馬を旅行者の幌馬車につけるように命じた。しかし、駅長がうちのなかに引き返してみると、若者は、まるで失神状態になって、長椅子の上に倒れているのである。ひどく気分が悪く、頭が割れるように痛むといい、とても旅は続けられそうもない。どうしたらいいのか！　駅長は取り敢えず、自分の寝台を彼に譲った。そして、病人がよくならないようだったら、次の朝、S町に医者を迎えにやることに決めた。

次の日、軽騎兵士官の病状はますます悪くなったようだ。士官の従僕は馬に乗って、医者を迎えに町に向った。ドウニャは酢に浸した手拭いを彼の頭に巻いてやり、自分の縫い物を持ってきて病人の寝ている寝台のそばに腰かけた。病人はそばに駅長のいる時は、はあ、はあ、と、苦しそうにうめき、ほとんど一言も言わなかった、そのくせ、コーヒーを二杯ものんだり、はあ、はあ、言いながら食事をたのんだりした。ドウニャは、彼につきっきりだった。彼はしきりに飲みものをほしがり、ドウニャは自家製のレモナードを入れた、手のついたコップを持ってきてやった。病人はそのコップにちょっと口をつけては、彼女にそのコップを返すんだが、コップを返すたんびに、感謝のしるしに、その弱々しい手でドウニャの手を握るのだった。午後三時頃、昼飯の時間のころ、医者がやってきた。医者は病人の脈をちょっととり、病人にドイツ語で一言、言って、今度はロシア語で、病人にとって必要なのは安静だけで、二日もすれば旅に出かけられるだろうと言った。軽騎兵士官は、往診料をはずんで、二十五ルーブルも渡し、昼飯を共にするようすすめると、医者は喜んで承知し、二人とも大変な食欲を示してよく食べ、ブドウ酒一本をのみほし、おたがいにすこぶる上きげんで別れた。

もう一日すぎると、士官は、すっかり元気になり、全快した。彼は異常なほど、陽気にふるまい、やたらに、ドウニャと駅長を相手に冗談口をたたいた。唄を口笛でふいたり、ほかの旅行者がくるとそれといろいろと話をしたり、その駅逓馬車券を、駅逓簿に書きこんだりした。だから人のいい駅長はすっかり彼が気に入り、三日目の朝、この親切な宿泊人が出発することになると、駅長は彼と別れるのが、辛くなるほどだった。その日は日曜だったので、ドウニャは教会のミサに出かけるところだった。軽騎兵士官用の幌馬車はすでに出発の用意ができていた。士官は駅長と別れのあいさつをし、宿泊とご馳走に対し、気前よく大枚の銭を払った。ドウニャにも別れのあいさつをし、ついで

に村はずれにある教会まで送っていこうと申しでた。ドウニャは、どうしたものかと迷って、立ちすくんでいた……。「なにをこわがっているんだね」と父親が娘に言った。「このお方は狼じゃあるまいし、お前をとって喰ったりはしないんだよ、教会まで一っぱしりしておいでよ」。ドウニャは幌馬車に乗って士官のそばに腰をおろし、従者は御者台のわきにとびのり、御者はひと声高く、口笛をふくと、馬は勢いよく走りだした。

哀れな駅長は、あの時、どうして、ドウニャに士官との相乗りを許してしまったのか、どうして、あの時、眼がくらんでしまったのか、あの時、自分の分別や理性はどうなってしまったのか、自分で自分がわからなくなった。半時間も経たないうちに、彼の胸は、ひどくうずきはじめた。不安と疑惑の予感が彼を深くとらえ、いても立ってもいられなくなり、自分も、ミサに出かけていった。教会に近づいてみると、人びとはもう帰ってしまったようだが、ドウニャの姿は、教会の菜園のところにも、階段を上った教会の入口のところにも見えなかった。彼は急いで教会の中に入ってみた。司祭は祭壇からおりてくるところで、助祭は燈明を消していた。二人の老婆だけが、まだ隅の方でお祈りをつづけていた。しかしドウニャは教会の中にもいなかった。哀れな父親は、やっとの思いで、ドウニャはミサにきていたか、どうかを、助祭にきくことにした。助祭は、彼女はきてはいなかったと答えた。駅長は生きた心地もなく、とぼとぼと家路についた。だがまだ一縷の望みが残っていた。ドウニャは、若気の至りで、若い者の移り気で、ひょっとすると、彼女の教母の住んでいる次の駅まで、いってみようと思いついたのかも知れない。苦悩にみちた不安のなかで、自分が娘を乗せてやったトロイカが帰ってくるのを待ちに待った。御者はなかなか戻ってこなかった。やっと夕暮れ時になって、その御者は、ひとりだけで、それもひどく酔っぱらって帰ってきて、「ドウニャは、あの駅からまだ先へ、あの士官といっしょに、立っていった」と、恐ろしい死の宣告のような知らせをもたらした。

老人はこの不幸に耐えきれなかった。彼はすぐ、その前夜まで、あの若い詐欺師が寝ていた寝台にぶっ倒れてしまった。今になって、すべての情況を思いあわせてみて、あの男の病気は仮病だったことに気づいた。哀れな老人は、ひどい熱病におかされた。彼はS町にと連れて行かれ、その駅長の仕事は一時、他の人がすることになった。彼の病気の治療に当った医者は、軽騎兵士官の診察にやってきた、あの同じ医者だった。医者はあの時、あの若い男はど

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c